

Title	GLOCOLブックレット03 はじめに
Author(s)	上田, 晶子
Citation	GLOCOLブックレット. 2010, 3, p. 3-5
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48265
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

はじめに

上田 晶子 大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任准教授

GLOCOLブックレット第3号を、「食料と人間の安全保障」というテーマでここにお届けする。本書は、GLOCOL共同研究「食糧の安全保障に関する学際的研究：食糧確保のセーフティ・ネットの事例の比較を中心に」の2ヶ年の成果である。草の根のレベルで人々が、日々、どのように食料を入手しているのか、そして、万が一のときのために、どのようなセーフティ・ネットがあるのかについて、世界のさまざまな地域からの事例をもとに分析をしている。

冒頭の論文で、上田は、セーフティ・ネットに関する最近の主な研究を概観し、政策としてのフォーマルなセーフティ・ネットについての議論、インフォーマルな草の根のレベルでのセーフティ・ネットの議論、そして、政策と草の根のレベルのセーフティ・ネットの関係についての議論を紹介している。それらの議論をふまえ、ブータンのトウガラシの取引を事例として取りあげ、ブータンの農村部で異なる取引の形態が人々にとってセーフティ・ネットとしてどのように機能しているかを考察している。

これ以降に続く論文で顕著なのは、草の根のレベルに焦点をあてていても、フード・セキュリティという問題の国際的なつながりを理解することの重要性である。湖中は、ケニアの国内避難民の事例を取り上げている。この考察が示唆するように、通常、国内避難民や(国境を越えた)難民の食料確保の問題は、避難先のキャンプ地での援助機関と避難民という枠のなかで、語られることが多い。湖中は、これまでそれほど触れられてこなかった国内避難民が、自身の家族や避難先の地域住民との間に作り上げた食料のセーフティ・ネットに焦点をあて、それらが国際的な援助機関によるグローバルなセーフティ・ネットをどのように補完しているかを分析している。

岸上は、外部の市場経済の影響とともに、環境汚染と地球温暖化の影響をも受けるようになってきているカナダの極北地域に住むイヌイットの人々の食料確保の問題をとりあげる。岸上は、イヌイットの人々の間に存在しているさまざまな食料分配の方法を紹

介したうえで、定住化や上記のグローバルな変化の影響を受ける中で、従来のインフォーマルな食料分配が機能しなくなっている状況を提示している。そして、そのようなインフォーマルな分配を、地方自治体によるセーフティ・ネットが補完している状況を検討している。

グローバルな市場の影響は、食料価格だけでなく、燃料価格という形でも人々の食料確保に重要な意味を持つことを示しているのが、阿良田による論文である。同氏は、インドネシア西ジャワ州からの事例を取りあげ、燃料不足という状況のなかで、親族や隣人との相互扶助関係がセーフティ・ネットとしていかに機能したかを、詳細に検討している。

思と住村は、社会主義体制下で、それぞれの世帯の小規模な果菜園が、食料確保のセーフティ・ネットとして果たしている役割を、ロシアのダーチャとベトナムの屋敷地でおこなわれる農業の事例から、それぞれ検討している。

中川は、「食料主権」と「農民的農業」という概念を検討し、小規模農家が、どのように生産が行われるべきだと考えているかを描くことによって、フード・セキュリティの問題を世界観とモラル観のなかで理解することを試みている。フランス南部での「農民的農業」の実践を紹介しながら、中川は、フード・セキュリティが単に食料の量と質の確保という問題だけではなく、その確保のプロセスをも含む概念となりえることを示唆している。

これらの考察から、議論のひとつの軸となりえるのが、政策と草の根のセーフティ・ネットとの関係である。政策としてのセーフティ・ネットと草の根のセーフティ・ネットが相互補完的な関係にあるのが、湖中や岸上を取りあげている事例と考えられる。それに対して、阿良田が提示する事例は、ある政策が実施された結果によって、草の根のセーフティ・ネットが必要となった場合であろう。思と住村は、草の根のセーフティ・ネットとして機能しているものが、政策の裏付けをもつものといえるかもしれない。

「食料」と「食糧」の使い分けについて、最後に短かく記しておくなければならないだろう。結論から先に記せば、本ブックレット全体として、このふたつの表記の「違い」について、統一した見解はあえて取らなかった。研究会内部での議論はあったが、それぞれが違うレベルで使い分けを行っていることが明らかになった。そして、編者としては、そのような異なる使い分け方がそれぞれの

研究の文脈と問題意識を反映したものであるという認識に立ち、各々の使い分け方を尊重したいという結論に至った。

食料の確保と草の根レベルのセーフティ・ネットの問題は、当初、研究会が始まったときに予測されたよりも、広い視野と深い視点が必要であることが、研究会を進めていくうちに明らかになってきた。具体的には、食料が生産され、流通し、消費されるまでの間の諸条件と環境に関するグローバルなレベルから草の根のレベルまでの広い視野であり、そこに展開される人々の営みの複雑さと柔軟さへの深い視点である。本書におさめられた考察から、さらに議論が発展していくことを願う。